

アートイベント「TOKYO 2021」を開催

—戸田建設初のアートイベント、各分野で活躍するクリエイターたちがTOKYOを再検証—

戸田建設(株)(社長:今井 雅則)は、2019年8月から10月の約3ヵ月にわたり、当社として初めてのアートイベントを開催します。

2019年12月に現在の社屋の解体を開始し、2024年に(仮称)新TODAビルが完成する予定ですが、新しいビルには、アートをはじめとするクリエイティビティを育み、発信する場が誕生します。再び京橋に新たな芸術文化施設とともに戻ってくることを宣言し、街から期待される再生を果たすためにも、現在のビルが解体され一旦姿を消すその前に、アートイベントを開催することとしました。

イベント名は「TOKYO 2021」。戸田建設が若手アーティストや建築家と組んで手掛ける初めてのアートイベントであり、当社として完成までの全てのプロセスから学び、未来に対して何ができるかを考え、昇華させていくための必要不可欠な通過点と位置付けています。

この2021年は当社にとって創業140周年を迎える年であり、かつ、長らく京橋の地で社業を営んできた社屋が2024年に完成する新社屋にその役割を繋いでゆく節目の年でもあります。アートイベントのテーマを通して、自らのルーツである建築・土木を見つめ直す機会になるとも考えており、多くの方にご覧いただけることを願っております。

【アートイベント「TOKYO 2021」】



この夏、各分野で活躍するクリエイター達が東京という都市の過去を新しい視点で検証し、未来を発見していくアートイベント「TOKYO 2021」が始まります。

本企画は東京・京橋にある戸田建設本社ビルの解体直前の空間を利用し、従来のオフィス街では実現が難しかったダイナミックな展開を、TOKYO 2021 実行委員会(総合ディレクター:藤元明/企画アドバイザー:永山祐子)が、戸田建設の主催とともに実現するものです。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックは、メディアから演出された日本が国内外に発信される機会になります。そこで表層化される日本像とそこに引きずられる価値観に対し、本企画では「建築」と「現代美術」のふたつの展覧会を通じ「2021年以降を考える」ことに大マジメに向き合います。

アートの観点だからこそできる、これまでの日本の都市史、美術史の再解釈と、これからの新しいヴィジョンを、東京を舞台に展開します。

詳細は公式ウェブサイト(<https://tokyo2021.jp>)をご覧ください。

名称: TOKYO 2021

会期: 2019年8月3日(土)～10月20日(日) 11:00-20:00

建築展:課題「島京 2021」(8月3日～8月24日 最終講評討論会:8月24日(土)午後)

美術展:「慰霊のエンジニアリング」(9月14日～10月20日)

※建築展・最終講評討論会後、8月25日から8月31日までは、ウィンドウエリアの建築展の成果物展示のみとなります

※9月1日から9月13日までは美術展の展示替えのため休場期間となります

プレスに関するプロジェクトスケジュール(予定)

8月2日(金) 記者発表(1) TOKYO 2021 および建築展 14:00-15:00(レセプション 15:00～)

8月3日(土) 建築展 オリエンテーション

8月24日(土) 建築展 最終講評討論会

9月13日(金) 記者発表(2) 美術展 14:00-15:00

公式ウェブサイト: <https://tokyo2021.jp>

会場: TODA BUILDING 1F (東京都中央区京橋 1-7-1)

入場: 無料

総合ディレクション: 藤元明

企画アドバイザー: 永山祐子

建築展/ディレクション: 中山英之

建築展/課題作成: 藤村龍至

美術展/キュレーション: 黒瀬陽平

美術展/会場構成: 西澤徹夫

運営: TOKYO 2021 実行委員会

主催: 戸田建設株式会社

建築展 課題「島京 2021」

ディレクション 中山英之

課題作成 藤村龍至

都市の前提が揺らぐ現代社会の変化を背景に、ポストオリンピック・パラリンピック＝2021年以後の東京の都市状況を「東京＝島京 2021」をキーワードに考えたいと思います。建築の教育現場では建築家から架空の設定をもとに課題が出され、それに対して提案が制作されます。課題には時代性や出題者の建築観が盛り込まれます。

今回は建築家である中山英之、藤村龍至が「東京＝島京 2021」の現状に対するオルタナティブを問う課題を作成し、「考える現場」としての建築展を提案します。参加者は若手建築家とともに展示期間の1ヶ月間を通じて制作と議論を続け、提案をまとめていきます。最後には多種多様なゲストを迎え討論を行い、来場者と共に東京の未来像について考えます。

美術展「慰霊のエンジニアリング」

キュレーション 黒瀬陽平

会場構成 西澤徹夫

「災害」と「祝祭」を交互に繰り返してきたこの国の歴史のなかで、美術、建築、土木といった、あらゆる文化や

科学は「慰霊のエンジニアリング(engineering of mourning)」を続けてきたといえます。本展では、美術家・黒瀬陽平のキュレーションのもと、近現代日本の「災害」と「祝祭」の歴史を振り返るとともに、いかに現代美術が同時代の他ジャンルと並走しながら「慰霊のエンジニアリング」を更新してきたのかを提示し、従来の日本現代美術史の枠組みの根本的な解体と書き換えを試みます。